

主图版 夫人程氏塔铭

生應化雖順軌
於六塵竟騰身
於百寶以顯慶

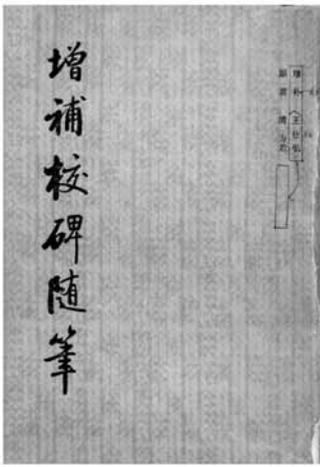
之矣夫人貞規
外融少崇寵
女之因長勵託

「落ち穂拾い記」 ⑫ 夫人程氏塔銘（中）

図版①方若著「校碑隨筆」



図版②「増補校碑隨筆」



図版③「程夫人塔銘」の巻頭部分



図版④「王居士碑塔銘」部分



『校碑隨筆』（方若著）は、碑法帖を扱う上に欠くことができない書物であった（図版①）。この戦前に刊行された著作を基に、大きく手を加えた『増補校碑隨筆』（王壯弘増補）が、八十年代の初めに刊行された（図版②）。当時この本は、日本でもよく売れたので、T書店の社長からこの『増補校碑隨筆』を翻訳しないと勧められた。I先生の監修で、どうかと。I先生の弟子の方と二人で、『増補校碑隨筆』を二分して翻訳を始めた。碑刻拓本の新旧、真偽、影印碑帖の評価等に関する著作であり、影印資料や拓本を広げて、本文の内容を確認しながら進めた。勤務時間が短く自由な時間が多くあり、この翻訳は自分の碑刻研究に益することが多かった。唐時代の碑刻部分を翻訳しているときに、増補部分の「夫人程氏塔銘」の記述文中に、「誌上断缺自夫人程氏塔銘始」（誌銘は、上部が断欠して夫人程氏塔銘より始まる）の語句に遭遇した。「夫人程氏塔銘」（図版③）の語句は、見覚えが在り、数年前北京で購入し、碑銘が不明の拓本を思い出し、取り出した。そして前号で紹介した不明の拓本が、唐の文明元年（684）十月刻の『夫人程氏塔銘』（右頁主図版）であることが確認できた。あの有名な唐の敬客の『王居士碑塔銘』が大磚塔銘（図版④）、この『夫人程氏塔銘』が、小磚塔銘として並び称されていた。ただ王壯弘の『増補校碑隨筆』のこの項目の内容を、確認して驚きがあった。『夫人程氏塔銘』文明元年（684）十月、楷書、剪装本を見るが、全体の行、字数は不明である。この石は古くは陝西、西安に在ったが已に原石は失われ、拓本を見ることは稀である。…中略…前に見た剪装拓本は、紙や墨色から清初の拓である。北京に重刻本があるという。」また王壯弘氏の他の著作『崇善樓筆記』では、この碑に関して、碑石は古くに失われ、拓本は世界で「一本本であろう（銘石久佚、海内僅有一二）」と記している。この家蔵本は、如何にしても世界に僅か数本しかない拓本の一本では、決してありえない。

伊藤滋（書齋名・木鷄室）

書道芸術院

令和の群像 (2020)



平成26年書道芸術院展秋季展・毎日アートサロン推薦作家展 「群れわたる鳥かげ」 須田清子書



須田清子

この原稿を依頼された今年は、想像も付かない大変な年となった。日々、コロナの感染症に戦い、時には生命の危機さえも感じさせる報道の多い年となってしまった。私はこの現実も偶然ではなく、自然界から発する人類に対して、ある種の警告ではないかと思ったりもした。緊急事態宣言が発せられ、外出さえ制限された時には、筆を持ち書をかく環境がいかに自分の心を整わせてくれたかを痛い程感じたのだった。そこで改めてこの機会に自分の書の歴史を振り返ってみようかと思つた。少しの努力と継続が苦痛でなく、楽しく続けられる世界がその人に向いている世界である”どこかでそんな言葉を聞いた覚えがある。私にとってそれが書の世界であり、筆を持つ環境であると信じて毎日を通じている。自己満足であっても、何と幸せな事だろう。私は子供の頃より筆文字に大変興味を持っていた。親に懇願して書道塾に通い始めたのが確か7歳の頃だった。それから現在に至る60年余り、深く関わった時や諸事情により多少書から遠ざかるをえなかつた時期はあつたにしても、縁は途切れず続いてきた。しかし書を通して見える景色は、その時々自分の信情や、力量によって違ってくるものだと言

う現実をも味わってきた。話は少し変わり、実に私的な事だが私の実家にあつた家系図によると、四代前の高祖父が、医業と言う本業とは別に地域の人達に無償で書を教えていたという事実を知った時は、何か先祖との深い縁を感じ、嬉しくもなつた。また子供の頃通つていた書道塾の先生が、地方ながら中央の書家の先生方と繋がりがあつたらしく、私が12歳の頃には、その先生から頂いた雅号を篆刻の大御所であつた内藤香石先生に刻って頂き現在も使用している。その先生からは当時の著名な先生方の肉筆の書の作品をも見せて頂いた。理解出来ないながらも、筆文字の暖かさを感じた覚えは今迄忘れられない。実にこの歳に成るまで、いかに書が自分の人生の彩りを深く、色濃くしてきてくれたかと思うと、書の世界に感謝の念を抱くばかりだ。もちろん今まで御指導頂いた諸先生方からの、大いなる良い影響もあつたの事は筆舌に尽きない。私自身書の世界を通して時には宇宙の広大さを覚え、海の深さを感じ、さらにミクロの世界をも垣間見る事が出来たらと常々願っている。書の最終境地としては”心手相応”に至れることであるが、それは大変な課題と思つている現在である。

書のひろば

理事長 辻元大雲

第72回全国学生書道展搬入審査

第74回書道芸術院展に併催される第72回全国学生書道展は、従来通り半紙部門と半切 $\frac{1}{2}$ 部門の2部門体制で行われ、10月26日作品が搬入され11月4日からの審査を行った。

搬入状況は別表の通りで、作品点数は両部門とも若干の減少となったが、参加団体は増加しており応募された皆さん方のご協力、ご支援に感謝申し上げます。

第72回全国学生書道展出品統計 () 内前回展

	団体数	出品点数	出品人数
半紙の部	164 (154)	12,051 (12,191)	6,496 (6,612)
半切 $\frac{1}{2}$ の部	104 (93)	2,255 (2,286)	1,818 (1,848)

搬入後作品整理を総務部が例年より一日多い日程で行った。コロナ禍の影響で感染防止のためA賞審査、中央審査なども日程を緩やかに、会場もゆとりある工夫をして行った。

A賞審査は例年通り11月4日に審査部長(尾形澄神部長)の進行でA賞選考委員(各地区代表)により半紙・半切 $\frac{1}{2}$ 両部門よりA賞候補選出を行った。A賞決定はA賞審査員(辻元大雲審査長ほか)により大賞以下各賞が決定した。現下の状況で出席できなかった選考委員・審査員もおられたが、やむを得ないことであり出席役員で適正かつ公平な審査を行った。

A賞授賞数はほぼ昨年並みの出品点数を考慮し昨年と同数とした。

定例理事会(11/23)書面開催へ講演会は中止、来年開催へ

11月23日、本院創立記念日開催予定であった定例理事会は現下の状況によりまたしても書面による開催となった。また、恒例の講演会も講師に台東区立書道博物館主任学芸員の鍋島稲子氏にご依頼してあったが、やはり開催は無理と判断し中止させていただいた。来年度に改めてお願いすることとした。

定例理事会の議案

1、第74回書道芸術院展、第72回全国学生書道展について

基本的に通常開催として実施する。

①研究会、表彰式、祝賀会について

・研究会は縮小し、2月6日のみ14時から17人展作家を中心に行う。

・表彰式 授与対象を減らして実施。

・一般展 秀作、佳作、褒状は授与対象から外して行う。

・学生展 団体賞は準優勝以上に授与。個人賞はA賞のみに授与する。

・席上揮毫会は行わない。

集合写真は行わない。

ワークショップ 2月6日、11日いずれも10時から学生展会場にて行う。(状況により中止も)

・祝賀懇親会 今回は行わない。

②人事について 昇格、復帰、移籍、退会など別紙により承認された。

・第72回全国学生書道展報告(前記)

2、報告事項

①第74回書道芸術院展評論家の眼 比田井和子、船本芳雲両氏に依頼。

②第74回展大作出品者(確認) 佐藤菜扇、広瀬舟雲、田代明眸3氏

③令和3年度単位認定講習会企画 本年開催を見送った岡山会場にて講師等は変更せず実施する。日程・ホテル変更(令和3年8月28・29日、倉敷せとうちホテル)但し、状況により開催の可否、受講生の見直しなどを検討する)

・その他 報告事項(略)

3、その他 創立75周年記念事業について 来年3月の理事会にて記念事業実行委員会を組織、事業内容などを検討する。

2021現代の書 新春展Ⅱ今いきづく墨の華Ⅱ和光のみで開催へ

新春恒例の毎日新聞社・毎日書道会主催の新春展は、今夏の毎日書道展開催見送りを受けて、セントラル会場での100人展は出品者選考が不可能なため、財団役員(顧問・理事・監事)24名に規模を縮小して開催することとなった。本院からは辻元大雲・下谷洋子の2名が出品する。既にポスター・案内状

などは作成され広く広報されることになっている。

今回展は出品者が少ないため作品図録はB5版位のカード形式となり、好きな作品を額に入れて飾れるようになっている。ぜひご覧を。

・会期 令和3年1月5日～9日

・会場 銀座 和光ホール

・注 今回はコロナウイルス蔓延の関係でギャラリートークなどは行わない。

・入場と退場を一方通行とする。(エレベーターを分けて利用する) 入場無料

・出品者 中野北溟、石飛博光、大井錦亭、岸本太郎、鬼頭墨峻、菅野清峯、船本芳雲、米本一幸、中村雲龍、赤平泰処、薄田東仙、遠藤 彊、片岡重和、下谷洋子、辻元大雲、仲川恭司、中原志軒、永守蒼穹、松井玉筆、室井玄鸞、柳 碧薜、渡辺美明、大谷洋峻、三宅相舟

〈干支文字〉



下谷 洋子



辻元 大雲

連綿 (3)

＊変体がなを使つての変化

変体がなは、滑らかに連綿しやすいように用いる他、さらに進めて、変体がなの使い方によって、文言の連綿の姿がさまざまに変化することの例をあげます。

○	ひ	意	移志
○	うみ	三	有美
○	あき	安支	阿起
○	そら	羅	楚
○	む	无志	武新
○	かな	奈	閑那
○	ける	累	者流
○	ま	末徒	満都
○	く	久毛	具裳
○	ひ	悲登	飛

基礎基本講座

現代詩文書基礎基本講座 (7)

小竹 石雲

【鄭羲下碑】鄭道昭北魏(五一一年)

鄭道昭が父・鄭羲の業績などを称えて書かれた摩崖碑である。はじめ天柱山に刻されたものを上碑といい、雲峰山中腹の石質のよい巨岩に再度刻されたものを下碑という。

・原帖



①写実的臨書



②発展的臨書



特徴

円筆を加味した北魏の楷書として有名で、ゆったりとした伸びやかな筆勢の中に、強い筆力の加わった雄大な書風である。清の包世臣は「篆勢(篆書の筆勢)分韻(隸書の韻致)草情(草書的情趣)畢く具わる」と賞揚した。

①写実的臨書

・字形：横広・懐広く・向勢
・連筆：ゆったりと大きなリズム
で(一本筋の通った雄大さ)

②発展的臨書

現代詩文書への導入目的で、ひらがなの融合を念頭において、行書的に臨書した。線の豊かさ、のびやかさは保ったまま焦らず臨書した。

第74回書道芸術院展

併催＝第72回全国学生書道展

- 会 期**：令和3年2月5日(金)～11日(木・祝)
9：30～17：30 (入場は30分前まで) ※11日(木・祝)は14：00閉室
- 会 場**：東京都美術館 (上野公園内)
〒110-0007 東京都台東区上野公園 8-36 TEL 03-3823-6921(代表)
- 主 催**：公益財団法人 書道芸術院
- 後 援**：文化庁・公益社団法人 全日本書道連盟・毎日新聞社
(一財) 毎日書道会

《表 彰 式》令和3年2月7日(日)15：30～ (受付15：00～)
帝国ホテル 富士の間

《作品解説会》東京都美術館展示会場

令和3年2月6日(土) 14：00～15：30

対象：「書道芸術院の書・現代詩文」展作家を中心として

第72回全国学生書道展

全国学生書道展指導者作品展示

- 会 期**：令和3年2月5日(金)～11日(木・祝)
9：30～17：30 (入場は30分前まで) ※11日(木・祝)は14：00閉室
- 会 場**：東京都美術館 (上野公園内)
〒110-0007 東京都台東区上野公園 8-36 TEL 03-3823-6921(代表)
- 主 催**：公益財団法人 書道芸術院
- 後 援**：文化庁・公益社団法人 全日本書道連盟・毎日新聞社
(一財) 毎日書道会・毎日小学生新聞
- 《表 彰 式》令和3年2月7日(日) 13：00～ (受付12：30～)
帝国ホテル・富士の間
- 〈ワークショップ〉
令和3年2月6日(土) 10：00～12：00
2月11日(木・祝) 10：00～12：00

石鼓文

せつこぶん

③

戦国(秦)

〔解説〕篆書は、漢字の五つの書体の中で最も古い書体である。現在見ることが出来る最古の漢字は、紀元前1300年頃の殷時代に中国で使われていた甲骨文であるが、その殷時代から、秦時代までの千数百年の間に、漢字は甲骨文、金文、大篆、小篆と変遷し、ほどなく隸書が誕生した。この甲骨

文から小篆までの書体を総称して、篆書という。呉昌碩(1844~1927)は詩・書・画・篆刻に精通し、清朝末期から中華民国にかけて活躍した芸術界の第一人者である。特に石鼓文の研究に終生情熱を注ぎ、その臨書は条幅、屏風、扇面など、さまざまな形式で多数残されている。(編集部)



(掲載図版・70%に縮小)

(第三鼓・田車篇) ……避戎止陟。宮／車其寫。秀弓／寺射。麋豕孔／庶。麀鹿雉兔。

* 図版の骨書が43ページに掲載されています。参考にして下さい。

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨(押印のみも可)

漢字研究部臨書課題 (半紙普通判・縦使用) 上記掲載部分より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題 (A. 大作の部 毎日展審査会員・会員サイズ以内、2×6尺・全紙も可) 当該古典の上記掲載部分以外も可。
(B. 小品の部 半切 $\frac{1}{2}$ 以上半切以内・全紙 $\frac{1}{2}$ (約68×68cm)以内も可(縦横自由))

十五番歌合

(伝藤原公任筆)

③

九番

九番
みよしのやまのし
らゆきつもるらしふる
さとさむくなりまさ
るなり
九番 惟(是)則
みよしのやまのし
らゆきつもるらしふる
さとさむくなりまさ
るなり

かな研究部臨書課題

特別研究部臨書課題

〔半紙普通判(料紙可)・縦長に使用〕
別紙を裁断して貼付も可。半懐紙は半紙サイズに切って使用のこと。
左記の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。(全臨も可)
B. A. 大作の部 毎日展覧委員会・会員サイズ以内、2×6尺全紙も可
小品の部 半切以上、半切以内(全紙約68×68cm以内)も可(縦横目止)
△当該古筆の左記掲載部分以外も可。▽

(掲載図版・70%に縮小)

(前田育徳会所蔵)

〈よみ〉
九番 惟(是)則
みよしのやまのし
らゆきつもるらしふる
さとさむくなりまさ
るなり

〈解説〉古筆は、筆者が断定できるものが非常に少ない。当時のすぐれた能書(小野道風や藤原行成など)や歌人(紀貫之や藤原公任など)がその筆者と伝承されている。「十五番歌合」の筆者は撰者の藤原公任(966〜1011)と伝えられてきたが今は藤原行成の孫藤原伊房(1030〜1096)の書とみなされている。伊房の真跡である「藍紙本万葉集」(国宝)の書きぶりが「十五番歌合」と同様に草仮名主体の大ぶりで堂々たることとその根拠となった。「十五番歌合」は平安朝の典麗優雅な書とは一風異なり、異彩を放っている。
(編集部)

※和歌の部分のみ臨書も可。
※古筆は原寸(以上も可)で臨書し
ましよう。

※落款を必ず入れる。
○○臨(押印のみも可)

漢字規定 初段以上 【一月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

辻元大雲 選書



勇 猛 精 進

よみ (勇猛精進)

書体 自由

習い方解説 (三)

辻元大雲

勇猛精進

(無量壽經)

(勇猛精進)

見慣れた四字句です。一年の終わりに改めて心引き締めて参りたいものです。意味は勇猛なる気力を奮いおこして、修行を怠らざること。

語句に合わせ、力強い筆致で、顔真卿、空海などの行書古典を念頭にしております。

羊毫中鋒筆による柔軟な線質を生かし、特に穂先の開閉に注意して運筆に気を付けてください。

これまで全て行書で、表情を色々変えてみましたが、書の表現は様々に変化できます。楽しくチャレンジしてみてください。

漢字規定 秀級以下 【二月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

名越蒼竹選書

清 澹
虚 泊

蒼竹

清 虚 澹 泊

よみ (清虚澹泊)

書体 楷書

習い方解説 (三)

名越 蒼竹

清虚澹泊

(清虚澹泊)

(漢書)

清らかで、あっさりとして無欲。

今回は楷書の極則と言われる歐陽詢の九成宮醴泉銘を意識して書きました。字形の縦長と背勢が特長です。その特長を強調しすぎると、別碑である皇甫誕碑に近づいてしまっ、私は臨書する度に己の非力さを再認識させられます。しかし、このような壁があることで私たちは鍛えられるのでしよう。九成宮のような楷書は一点・一画でもゆるみやずれが生じると全体が崩れてしまうので一瞬たりとも気が抜けません。緊張感を持続させる訓練にはもってこいの古典と言ってよいでしょう。

かな規定 初段以上 【二月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判(料紙可)

大辻多希子選書

習い方解説 ③

大辻多希子

木の間洩る月のかげとも見ゆるかな
はだらに降れる庭の白雪

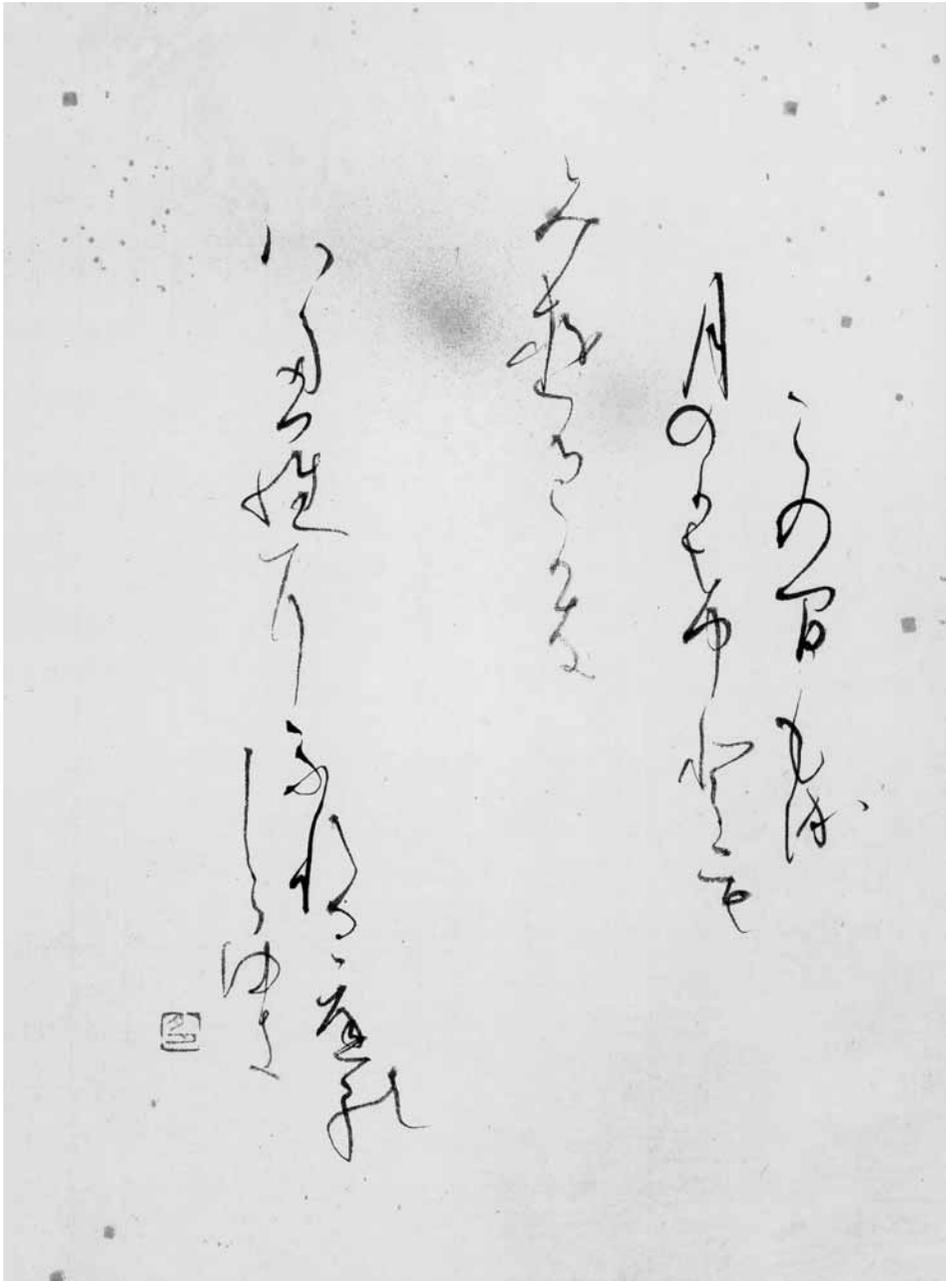
(山家集)

まだらに庭に積もっている雪は、
落葉のため木の間が粗くなったそ
の間を洩れて来る月の光かとも見
えることだ、の意。

西行は平安末期、鎌倉時代の幕開
けという激動の時代に生きた歌人。
「山家集」は西行の歌集です。

散らし書きの構成は、一行の長さが
同じにならないように気をつけ、ま
た各行の高低の変化も大切な要素に
なります。漢字は一字一ことのタテ、
ヨコの画がそろい、整然と並んでい
るときれいに見えますが、かなの場
合、線の方向が揃わずに微妙にタテ、
ヨコがずれながら流れます。流れを
出すために、手首の力をうまく使え
るよう何度も繰り返し練習すること
が大切です。

*料紙は半紙版(33.0×24.5cm)
を使用しましょう。



よみ方

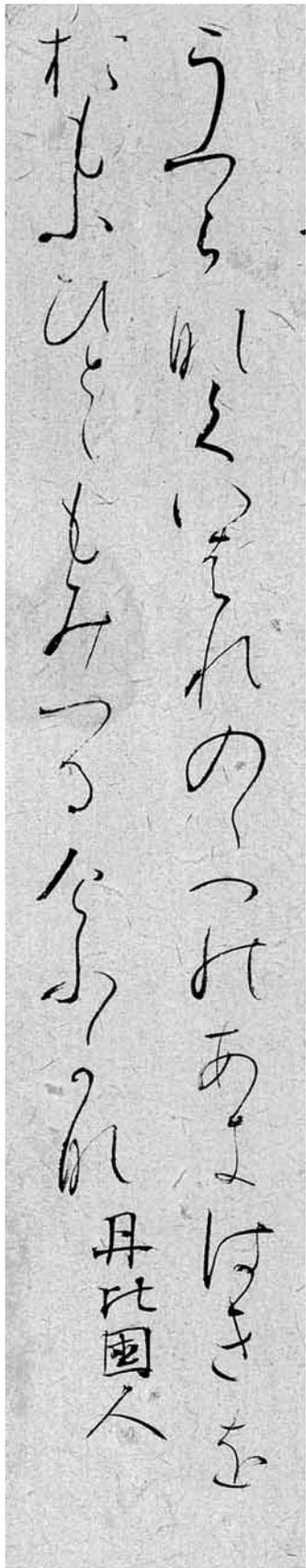
木(こ)の間洩(も)る(流)月(づ)か(可)げ(希)と(登)も(毛)見(み)ゆ(遊)るか(可)な(奈)
は(八)だ(多)ら(羅)に(耳)降(ふ)れる庭(にわ)の(能)白(しろ)雪(ゆ)支

創作

かな規定 秀級以下 【二月十五日締めきり】 用紙 半紙タテ1½ (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真の和歌を臨書する。または部分(2字以上の連続または単体を含む)を臨書する。

粘葉本和漢朗詠集
(掲載写真拡大120%)



よみ方

うづらな(那)く(久)いは(者)れの(能)あき(文)はきを
お(於)もふひと(も)みつる(介)ふか(可)な(那)丹比國人

かな条幅規定 【二月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切 (料紙可)

佐藤希雲 選書

習い方解説 (三)

佐藤希雲

雪残る頂一つ国境

(正岡子規)



よみ方 雪残(能)こ(る)留(頂)一(日)と(つ)徒(国境) 子規の句を

創作

俳句の一行書きです。漢字が多く、全体のバランスが難しいと思いますので適宜、かなに変換してもよいでしょう。いずれにしても、文字の大小に留意してまとめることがポイントになります。それから、墨量の調整についてですが、たいいてい思い通りにはいかないものです。私は「こころをこころで」ティッシュで筆をぬぐって、余分な墨を取るようになっています。ご参考までに。

*タテ形式に限る

漢字条幅規定 初段以上 【一月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

千葉蒼玄選書



張旭三杯草聖傳 脱帽露頂王公前
(張旭は三杯草聖と傳ふ 帽を脱して頂を露す王公の前)

書体||自由

漢字条幅規定 秀級以下 【一月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

大隅晃弘選書



德不孤必有鄰 (論語)
(徳は孤ならず、必ず鄰有り。)

書体||自由

習い方解説 (三)

千葉蒼玄

中国の明清時代は長条幅、連綿草という形式が生まれるが、その原点はやはり唐の張旭、懷素だろ。狂草を書き、世に張顛素狂とよばれた。

連綿になると字形をしっかりと押さえておかないと崩れて読めなくなってしまう。原点はやはり「十七帖」、孫過庭の「書譜」などにより勉強することが大切である。

※タテ形式に限る

習い方解説 (三)

大隅晃弘

一行六字を隷書で書作しました。隷書は、顕著な波磔を持つ八分隷と素朴な佇まいを持つ古隷とに大別されます。字画構造に大きな差異はありませんが、波磔の有無や書線の表情で多様な表現が生まれます。

今回の作例にあたっては、古隷をイメージし、側筆による線質の変化を求めました。字間を一定に保つことで、作品に明るさを与えます。

「天災は忘れられたる頃来る
 の言葉で有名な寺田寅彦は、
 幼少く少年時代を父の郷里高知
 で過ごしました。高知市内に
 邸宅があります。」

舟錦書



◇用紙 市販ハガキまたは私製のハガキ大(14.8×10cm)の白紙を使用
 ◇黒インクのペンを使用(ボールペン・フェルトペン可)

書体＝自由

「注意!! 用紙サイズ(14.8×10cm)を守って下さい。」

習い方解説 (三)

川島舟錦

質問4

「リズムにのるといことがわかりません。連綿のところが、特に困ります。」

「仮名の基本を学習するとわかりやすいですね。(急がば回れ)単体から連綿、さらに和歌など自在に書けだすと、遅速や潤濁に通じる。そうすると、止まり所がわかるし、動きも大きく伸びやかになりそうです。」

「天災は忘れられたる頃来る」の言葉で有名な寺田寅彦は、幼少く少年時代を父の郷里高知で過ごしました。高知市内に邸宅があります。」

御中 御一同様 初冬 歳の瀬も

御中 御一同様 初冬 歳の瀬も

残り少ない日々、押し詰まってきたこの頃

残り少ない日々、押し詰まってきたこの頃

三浦鄭街

(楷書) 御中 御一同様 初冬 歳の瀬も
(楷書) 残り少ない日々、押し詰まってきたこの頃

(行書) 御中 御一同様 初冬 歳の瀬も
(行書) 残り少ない日々、押し詰まってきたこの頃

基本用語

「御中」団体や会社などに宛てた敬称。
「御一同様」同様に団体宛に差し出す場合に使用する。

(掲載手本90%に縮小)

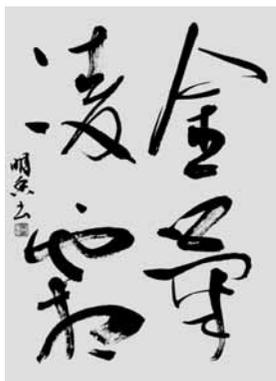
- ◇ 小筆・筆ペン・サインペンなどを使用 署名は各自の姓号を
- ◇ 用紙は普通版半紙横 $\frac{1}{2}$ (24.5×16.5cm) B5版コピー用紙(26.0×18.1cm)も可
- ◇ 所定の出品券を作品の右下に貼る <審査会員を含む誰でも出品可>

ホープ作品
各部総評

NO. 714

漢字部 師範 永井 明香

自由自在の巧みな筆さばきに魅了される作。小気味よいリズムで終始一貫多彩な線質表現で調和す。
◎漢字部総評 全体的に気迫の伝わる作が多く、書風も多種多様で習熟した手腕が窺える。下級作品は、古典の勉強を要す。(藤扇評)



漢字条幅部 師範 富原 属水
大きな連腕のリズムが紙面に動きを与え、躍動感ある作。大小の変化も調和よく心地よい作。

◎漢字条幅部総評 上級二行書きは無難にまとめた作多し。安定感あるが更に工夫がほしい。下級一行は文字バランスに一考を。(大雲評)



前衛書部 特選 相川 治舟

創意工夫による造形発展の妙。充分にその心構えを感じる。この時の心の調和を忘れずに。
◎前衛書部総評 モチーフの考察に心を砕いたと思う作品多し。このスタンスで前進を。(慧香評)



かな条幅部 師範 清水由紀子

穏やかでほっとさせられる作品である。特に墨色の美しさは表現者の心の内を見る思いで楽しい。

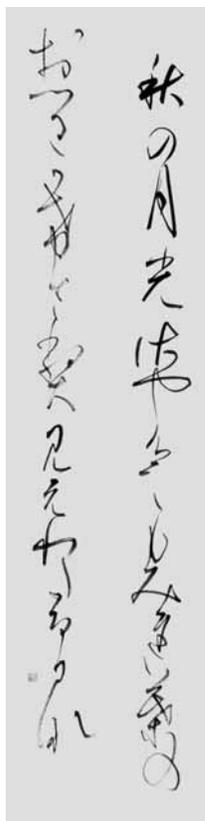
現代詩文書部 特選 石崎 正子

月の音を聴く。句と作品の一体感見事。また下部の余白も情景を良く捉えて生きている。
◎現代詩文書部総評 線が単調にならないよう潤渇等気をつけて書作して下さい。(掃雪評)



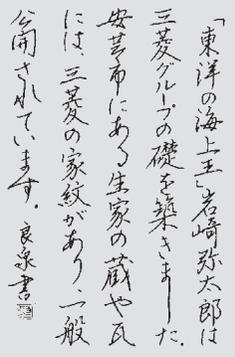
◎かな条幅部総評 影の誤字が多

く残念。又、字の大小の極端な変化は品性を欠くので慎みたい。全



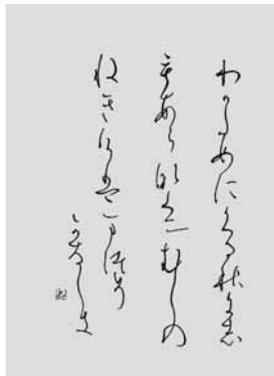
ペン字部 師範 後藤 良泉

ペンの巧みな筆致が心地よい。布置もよく、温雅な流麗さとメリハリの良さで清々しい作品。見事！
◎ペン字部総評 行間の余白はよく考慮されていたが、天地の余白が足りない作品も多々。漢字かなのバランスを大切に。(孝子評)



かな部 師範 須田 香舟

筆の弾力を生かした、大らかなリズムに惹かれる。特に潤渇連綿の滑らかなしなやかさが美しい。
◎かな部総評 上段の方はなるべく料紙を用いたい。かなは紙色や図柄も鑑みた表現も難しいが楽しいので試みてほしい。(洋子評)



今月の

特別研究部優秀作品(特選)

選評 辻元大雲 石井明子 佐藤菜扇 倉林紅瑤

小品の部

◆弧を描く面主体の構成が新鮮、濃墨による潤濁の変化が美しく、モダンな作となった。(紅瑤評)

前衛書 (青蓮) 山崎 恵 「輪廻」



山崎 恵書 34.5×68cm

漢字 (四枝) 及川豊流 「和気致祥」



136×35cm

及川豊流書

◆線に抑揚と深みがあり、懐大きく暢びやかな作。柔らかな筆致で落款まで見事にまとめる。(菜扇評)

現代詩文書 (花埜) 高橋奎媛 「宏之の歌」



高橋 奎媛書 35×67.5cm

◆大胆な構成が、小品ながら広い余白の効果を生かした。诗情溢れる作。(大雲評)

臨書 (紅瑤) 原島春汀 「石鼓文」



原島 春汀 臨 34.5×135cm

◆ほぼ原寸大、構成も同じく緻密な臨書作。原帖の骨格、線質をよく理解して着実な臨書作である。(大雲評)

創作の部(43点)
漢字 6点
かな 1点
現代 5点
篆刻 0点
前衛 11点
臨書の部(23点)
漢字 22点
かな 1点
総出品点数 66点

- 〈特選候補者〉
- 〔漢字〕
 - 〔創作の部〕
 - 花埜 高橋 清琳
 - 〔かな〕
 - 卯月 木村 閑泉
 - 奥田 生駒 久華
 - 〔現代詩〕
 - 書游 小野寺みよこ
 - 蒼風 笹木 蒼風
 - 玄穹 尾形 紅霞
 - 大雲 柿沼 彩香
 - 四枝 大友 四峰
 - 〔前衛〕
 - 杏苑 松永 杏苑
 - 蓮紅 大友 紅春
 - 大拙 佐藤 陽子
 - 〔臨書の部〕
 - 〔漢字〕
 - 千葉 種谷 悠輝
 - 千葉 益子 翠蘭
 - 千葉 安藤 叙孝
 - 大雲 江本 興舟
 - 澄春 土屋 恵仙

かな (氷壑) 伊澤香雨 「百人一首」

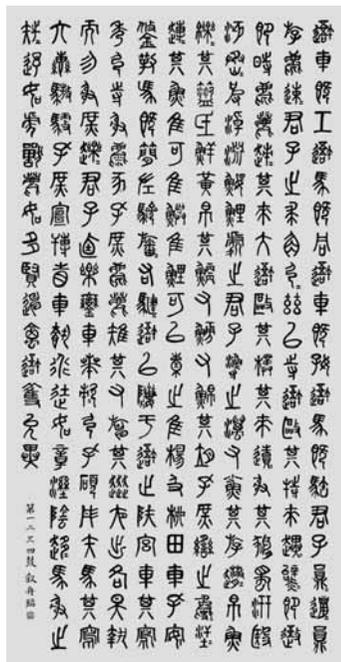


伊澤香雨書

(135×34.5)cm×2

◆新しいかな作品の出現!かなの決めごとにと縛られない思うがままの表現が独特で強く引きつけられた。(明子評)

臨書 (千葉) 竹浪叙舟 「石鼓文」



竹浪叙舟臨

136×69cm

◆先月に続いているのホープ。努力に敬服。石鼓文の特徴、篆書の用筆を見事に手中にされた作。充実安定作。(大雲評)

前衛書 (紅瑤) 栗原りか 「輝」



栗原りか書

61×176cm

◆濃墨によるエネルギー感。シュな筆致が魅力。空間処理が巧みで余白も美しく、躍動感あふれる作。(紅瑤評)

漢字 (大拙社) 畠中成山 「良寛詩」



畠中成山書

52.5×225cm

◆潤濁が立体感を生み安定した中に華やかさのある作品となった。骨力ある線が魅力的。(菜扇評)

総出品点数 54点	〈特選候補者〉	創作の部(40点)
漢字 12点	「漢字」	漢字 6点
かな 2点	青山 熊谷 青山	かな 8点
	もく 青木 藤漣	現代 10点
	「かな」	前衛 16点
	奥田 三宅 直美	臨書の部(14点)
	如月 治田 芳江	漢字 12点
	「現代詩」	かな 2点
	うる 橘 由華	
	花香 藤井 花香	
	八戸 市川 紫泉	
	「前衛」	
	月華 中塩 朱華	
	玉州 遠藤 和香	
	容洲 阿部 邑里	
	紅瑤 佐藤 成美	
	「臨書の部」	
	「漢字」	
	英峰 吉瀬 彩雨	
	紅瑤 木暮 千晶	
	紅瑤 相澤 敦子	
	紅瑤 金井みどり	
	「かな」	
	千葉 松重 翠景	

漢字研究部
(石鼓文)

選評 稲垣小燕

今月のホープ作品



佐々木 藍 水

◎漢字研究部総評

石鼓文は損傷がひどくて字画が明瞭でない
難点が多いので臨書するに当っては、先ずは
添えられている解説文をよく読むことが大事

です。幸いなことに、石鼓文に関しては、その生涯の殆どを古典の臨書を書き続けたという呉昌碩の臨本が残されていて、これを参考にすることも学書の手がかりになります。出品作には誤字が多く、扁平な線質の作が多数見られました。折角の学びの機会です。細部まで注意深く観察して丁寧に取り組む姿勢が大切です。



睦永清蒼祥岳
月篁麗舟扇舟



雪幹直陽 美
篁生浩子 翠



千汀菊翠典政
代子泉枝玉子代

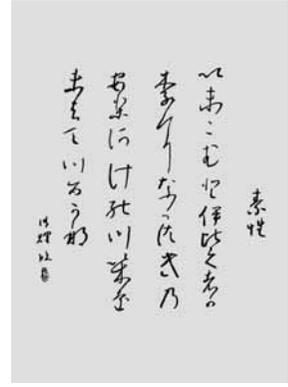


恵美 紅雅育
美梢 瞳 霞芳嗣

かな研究部
(十五番歌合)

選評 松村くにと

今月のホープ作品



磯貝清耀

かな研究部 特選 磯貝清耀
万葉がなによる漢字的古筆の特徴を良く捉え、力強く大胆な筆致は見事です。側筆による筆の開閉も巧み、気脈も自然に流れています。
◎かな研究部総評
字形は丁寧に臨書しているが、墨が薄い作品が気になりました。全体がぼやけ、線も弱く見えます。墨の濃度にも注意を！



翠哲幹 陽子生
光和香代 堂子子
由花悦美 子源子
一雪白 美翠瑠

かな研究部成績表

華東大久誠日	春清東昌無立	上高墨墨大	ここやう北明天	白有花梅華紅大	磯貝清耀
仙向版書賀和新	汀月伯苑門精	泉崎縁花版	ま原漢璋	秋舞仙桃璠雲	特選
菊菅岡村石	渡境山吉山千	加藤玉中田田	飯仁仁仁仁	古山伊山口藍	磯貝清耀
恵静山由紀嘉	紀和真翠清白	登節智良翠翠	幹幹幹幹幹	一雪白清	磯貝清耀
水代子花苑嘉	紀和真翠清白	登節智良翠翠	幹幹幹幹幹	一雪白清	磯貝清耀
松村佳	己如月上紫若	一大遊水春上	秀玉玉紅玉	A明菊正春山	大雲
阿久澤隆華	山武増本堀藤	早長永中中	中筑田関須	普清嶋島柴	佐久間澄美
光彩	こ幸華椿春こ	声川中真仙	高華澄長麗上	幸露露露露	高正洞
浅明青木	山野本柳	宮内宮宮三	松前深原長	萩野野根沼	西山中
江月郷	麗松葵	彩梅奈砂	成成成成成	洋幸幸幸幸	美美美美美
高竹八雲	春光竹千高	澄るうだ明	こ高大華伏	于白広蘭土	瑠璃原老登
神代七雄佐	櫻櫻酒齋齋	小松松松松	小林島暮武	倉草桐岸菊	神川川川川
玉葉裕光	木淳和龍智	典典典典典	裕裕裕裕裕	桃ふふふ	玄真真真真
選外蘭汀	華華華華華	桜松二銀菊	大石千高	高幽生大A	前誠光長大
渡邊遠	吉田山山山	守友木守	茂村宮宮宮	宮松松松	松松松松
147名氏名略	信信信信信	彩香香香香	美美美美美	香香香香香	香香香香香



避戎止陟



車其寫



秀弓寺射



麋豨羴

(第三鼓・田車篇) ……避戎止陟。宮／車其寫。秀弓／寺射。麋豨羴／麋。麋鹿羴兔。

●篆刻

【一月十五日締めきり】

〈出品規定〉審査会員を含む、誰でも出品可。

- ① 摹刻 (ア) 課題による語句 (イ) 原印自由 (出品の際、原印のコピー添付)
- ② 創作 語句自由

- 印面の大きさは2.3cm(八分角)以内とし朱文、白文自由。
- 印箋は市販のもの、半紙横1/2の大きさに切ったものも可。
- 創作、摹刻とも応募は一人一点。

12月号 篆刻課題

〈原印コピー〉



後漢印

◎出品方法

用紙の右側に押印し、左側に印影の釈文を明記 並びに落款(氏名)を入れる。

714号篆刻優秀作品

〈特選〉



摹刻

特選 織田 眞奈美
確りとした刀法で運刀されている。可成りの経験者と思われる。



創作

特選 大沼 樺峰
実力者。細部に巨り構成の妙、一日の長あり、左右のバランス佳。

◎篆刻部総評

今回は上位作品に大分、習熟された作者が登場し作品レベルが格段に上昇した感があります。大変よい傾向かと思えます。(大峰評)

秀作(60書題)	特選	佳作(60書題)
大雲 小沢 華仙 硯水 久保村 南城 北日 成田 能喜	附中 織田 眞奈美	唯一 逢沢 唯一 大雲 柿沼 彩香 大網 片岡 豪峰 上泉 後藤 考市 遊雲 中川 研治 やま 橋本 清麗
入選(60書題)		
芳琴 小野寺 幸喜 大雲 高武 弘文 蘇我 佐藤 育嗣 書游 庄司 咏艸 香書 須賀澤 一起 生大 吉原 進		

秀作(60書題)	特選	佳作(60書題)
小映 金谷 皓洋 大雲 佐藤 希雲 四枝 塚田 美翠 生大 中島 義則	石心 大沼 樺峰	弘舟 阿部 祥越 石心 伊藤 祥花 慈空 坂本 寛山 富見 野木 紫蘭
入選(60書題)		
書画 相川 治舟 遊雲 赤星 文庵 秀恵 阿部 雅悠 眩耀 佐々木 青霞 炎佳 佐藤 華炎 声香 関口 天峰 宮内 成子		

選評 後藤 大峰

昭和五十年一月二十七日第三種郵便物認可
令和二年十一月二十五日 印 刷
令和二年十二月一日 発 行

(毎月一回一日発行) 書道芸術 第七一六号

◎郵便物・清書・送金・一般事務等は

101-0031 東京都千代田区
東神田一―一六―一七
東神田プラザビル三階

公益財団法人 書道芸術院

電話(03)3862-1954
FAX(03)3862-1957

お問い合わせ、ご連絡は、
月曜日～金曜日九時～十七時の間に
お願いします。(土・日・祝日は休み)

送 料

一か月の購読部数
1部～9部までの一回の郵送料

1部	79円
2部	95円
3部	103円
4部	119円
5部	135円
6部	151円
7部	167円
8部	183円
9部	199円
10部以上	送料免除

令和二年十一月二十五日印刷
令和二年十二月一日発行

定価 一部 七五〇円

編集兼 辻元洋一(大雲)
発行人
発行所 株式会社リンクス
印刷 小沢写真印刷株式会社
公益財団法人 書道芸術院

〒101-0031 東京都千代田区東神田一―一六―一七
電話(03)3862-1954
FAX(03)3862-1957
振替001504135058
ホームページ http://www.hins.co.jp/shoga/